

プロジェクト活動報告：

人獣共通感染症の社会的要因－近代における生命といのちのつながり

最終年度は、日本における鳥インフルエンザの蔓延を意識した鳥の環境認識についての研究を続けると同時に、その過程で得られたディスカッションを学内外の教育・学習プログラムに還元しました。

プロジェクト代表者は、大阪大学において、大阪大学 AESAN キャンパスというプロジェクトを担当しています。「人獣共通感染症の社会的要因」における考察は、ASEAN キャンパスにおける教育プログラムの教育における重要な要素となっております。2024 年度に実施された海外フィールドスタディ「雲南・ベトナム」では、薬剤耐性菌の問題を中心に「人獣共通感染症の社会的要因」に関する教育を行いました。また、2025 年度より新規に開設する予定の OSAKA UNIVERSITY INTERNATIONAL CERTIFICATE PROGRAM（OUICP）「健康と社会」の教育コンテンツにおける ONE HEALTH の分野においても「人獣共通感染症の社会的要因」その成果は取り込まれることになっています。

また、2024 年 11 月に行われた第 17 回適塾講座：病気を環境するにおいても「人間と環境が作りだす環境と健康」というテーマで講演をさせていただき、学外の市民の方と「人獣共通感染症の社会的要因」に関するテーマについてお話しする機会を得ることができました。

このほかにも、ASEAN キャンパスの SDGs 共創フォーラムのうち、ハラルイ・ノベーションとの関

連で、人獣共通感染症が別の健康課題に影響を及ぼす事例についても考察を行いました。例えば、東南アジアにおいて糖尿病などが急増していることを背景に、人工透析に使われる抗凝固剤ヘパリンの使用も増えているのですが、この原料には牛や豚の腸管が使われています。BSEなどの新興感染症（人獣共通感染症）の出現とその歴史的な変遷（社会的要因）が、他の健康課題にも大きな影響を与えるようになっていくことについて理解することができたと考えます。